

地涌菩薩が各自が分身仏としての元の弘経の国土に於ての広説此経。即ち今。二十不輕品に於て付属せられし法華経を護持弘経と解するなり。即ち宝塔品十一後半より神力品二十一前半迄の虚空会処即不可思議阿僧祇劫時即三千座点劫時の説法会処に於ける法門なりと解すべきなり。風属品云 時釈迦牟尼仏 令十方来諸分身仏各還本土而作是云。諸仏各随所安多宝仏塔還可如故。と有る分身仏、各還本土、と同意の分身仏本土に於ける弘経と受取るべきか。

## 佐前教学についての一考察

関 戸 堯 海

『守護国家論』では法然浄土教批判をめぐって生ずる様々な問題について、丁寧な検討が繰り返されている。はじめの正文第一は、さらに四節に分かれている。その第一節に於いて一代五十年の代表的な経典の説法の順序

について述べているが、再び第二節で経典の内容の浅深について論じている。この部分は引用される経典や論法などの面で重複する要素が認められる。

日蓮聖人の遺文全体を拝読すると、『守護国家論』で何度も繰り返されている丁寧な検討が、『開目抄』『報恩抄』などの重要著作の基本となっていることがわかる。

この点については、左記のような具体例を検証することによって知ることができる。

(一) 『浄土決義鈔』『彈選択』『摧邪輪』についての記述

(二) 無量義経の華嚴海空

(三) 法華経を諸経中の王とすること

(四) 涅槃経と法華経の勝劣

(五) 自宗の依経を第一とする点

内仏滅後の仏法の滅尽

(六) 華嚴・法相・三論の教判

このようなことから、『守護国家論』に於ける仏教大系についての基礎的な考察が『十法界明因果鈔』『頭誦法鈔』『浄土九品之事』などの佐前期の遺文に反映していることがわかるのである。さらには佐後期の『開目抄』『神国王御書』『一代五時図』『撰時抄』『報恩

抄』にも『守護国家論』と同様な表現があることに注意したい。特に『報恩抄』には、執筆時に日蓮聖人の座右に『守護国家論』があつたのではないかと思えるような近似した表現が用いられている。

叙上のような考察によつて、『守護国家論』を執筆した正元元年の時点ですでに日蓮聖人の基本的な仏教理解が確立されていたことが再確認できた。そして、その理念が『顕勝法鈔』『開目抄』『報恩抄』などの佐前・佐後の遺文へと継承されていることを指摘できると考える。日蓮聖人の宗教は文永八年の法難を契機として大きな深まりをみせることとなるが、仏教体系についての基本的な理念については佐前から佐後へと継承されているのであり、ここに日蓮聖人の生涯を一貫する仏教観が存在していることがわかる。このため改めて日蓮聖人初期教学の重要性が再認識されるのである。

## 法華経——この不思議な経典——

芹 沢 寛 哉

決して大部とは云えない経典であるが法華経ほど読む人の心と態度によつて異つて評価される経典はあるまい。富永仲基等の実証的合理主義たちは、内容のない讃辞のみと評し、天台は全経典の中最勝なりと論究して居り、その中間には多くの見解がある。しかし日蓮聖人の如く、身心を法華経の故に捨てるは無上の喜びであるとして、身読された経典は、他に見当らないであろう。日蓮聖人には遙かに及ばないのは当然としても以下私の思索体験から読んで得た法華経観であるが、それでも余りに多くの内容が含まれているのを感じ、この一部の経典に対し、驚きを禁じ得ない。

### 一、法華経の宗教

法華経は宗教經典であるが決してそれだけではない。しかし日蓮聖人の観心本尊抄の、法華を識る者は世法を得べきか、の意に沿つて法華経を理解するためには、法